

トナカイ遊牧民 カムチャツカのもうひとつの顔

小樽商科大学言語センター教授

大島 稔

先住民族の民族

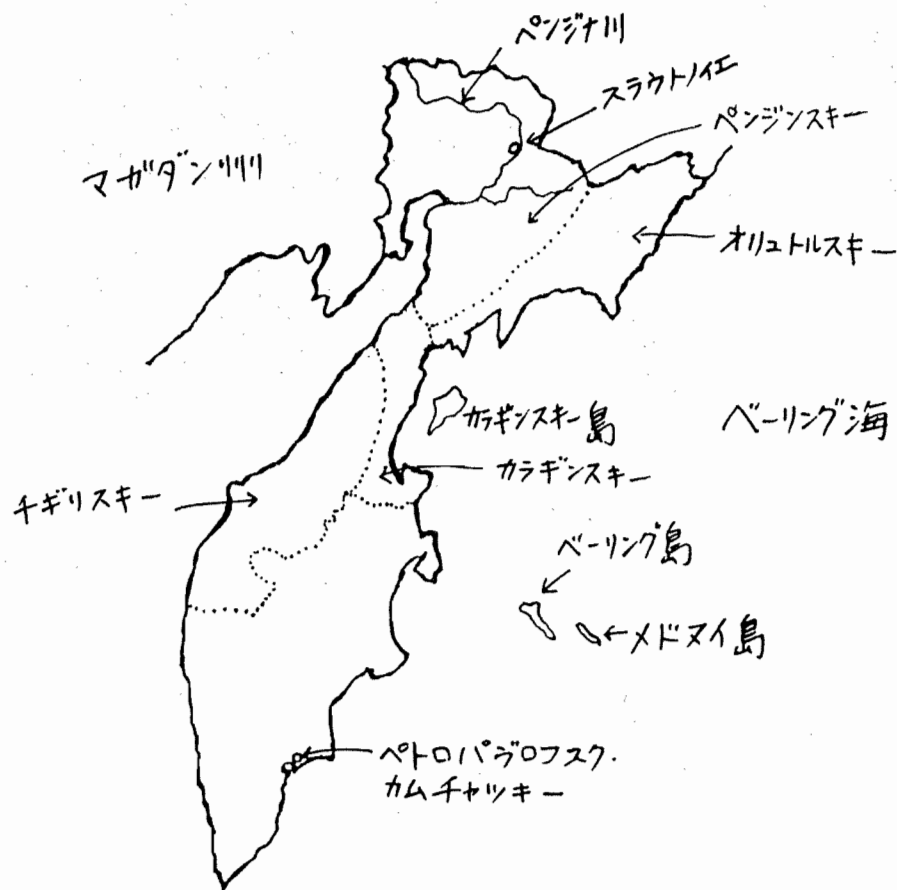
北海道にもともと住んでいたアイヌの人々と同じように、カムチャツカには一万年以上も前からこの地に住みつづけているコリヤーク、チュクチ、イテリメン（カムチャダールという名でも知られるが、現地ではロシア人と混血した人々をさして使

う）などの先住民族の人たちが住んでいます。私の目下の仕事は、存亡の危機にあるといわれるカムチャツカの北方先住民族の言語や文化を調査し、それを記録に残すことです。一九九六

年の十一月に私を含めた三人の日本人がカムチャツカ半島の付け根、北緯六三度東経一六八度付近にあってトナカイ遊牧を営んでいるコリヤークの町、スラウトノイエまで調査旅行に赴きました。

スラウトノイエは一九九四年現在、人口が六百七十人でそのうち先住民は三百六十二人と半数以上を占め、そのほとんどが町唯一の産業であるトナカイ遊牧の仕事に従事しています。ロシア人は主に建築、土木、運送、行政、学校、幼稚園などで仕

カムチャツカ州





1,500頭のトナカイの群れ

事をしています。

スラウトノイエもそうですが、コリヤーク民族は一九三〇年十二月月からカムチャツカ州内で自治が認められ、コリヤーク自治管区として独立の行政単位を形成しています。自治管区は、北から順に北西部のペンジンスキー、北東部のオリュートルス

キー、東海岸のカラギンスキー、西海岸のチギリススキーの四つに行政区分されています。

行政の中心はチギリススキー地区のパラナ市です。自治管区の人口は一九九七年の国勢調査によりますと三万二千四百二十二人で、人口密度は一平方キロ当たり〇・一人と少なく、スラウトノイエのある北部ペンジンスキー地区は最も人口密度が低く、一平方キロ当たり〇・〇一人です。

ツンドラの上を飛んで

ペトロパヴロフスクからペンジンスキー地区の飛行機の中継地であるチリチキを経て、ヘリコプターでスラウトノイエに向かうことになりました。空からカムチャツカ北部を眺めると、高い山は見あたりません。ところどころ、川に沿ってポプラ、シラカバ、ヤナギが少し生えているほかに、見渡す限り雪原が広がっています。北海道の釧路や網走などの道東の風景を思い浮かべるとよいでしょう。

ただ、道東と違う点は、地下一メートルから最深で二百五十メートルまでが一年中凍っていることです。凍った大地は、夏でも表面が少し解けるだ

少数民族の人たちは、自治管区の全人口の約三分の一にあたる一万六千九百九十四人で、カムチャツカ州全体の約〇・七％に相当するといわれています。少数民族の中でもコリヤークが一番多く、自治管区全体の人口に対して約三二・一％、つぎにチュクチが約四・八％、イテリメンが約三・七％、エウエンが約二・一％で、その他のアレウトなどは極く少数となっています。

けです。冬は硬くしつかりした大地ですが、夏に歩くと、まるで水を吸ったスポンジの上を歩いているような感じですが。地下が凍っているこのような地形をツンドラ（永久凍土）と言います。

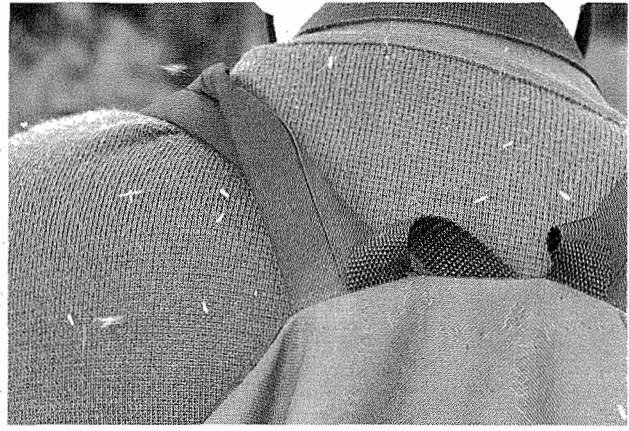
象の何倍も大きくて、長くて曲がった大きな牙の、今ではもう絶滅したマンモスが、腐りもせず数万年前の生きたままのような姿で、このツンドラの氷の中から発見されたニュースを聞いたことのある人もいるかと思えます。シベリアには一万年前からこのマンモスが棲息していたといわれています。コリヤークをはじめとする北方の先住民族はこれら

機上から眺めたツンドラ



のマンモスを狩猟していたマンモスハンターの直接の子孫であると考えられています。

このツンドラは、夏になると凍っていた表面の氷が解けて、水が地表を覆い、湿原のようになります。色とりどりの花が短い夏を惜しむように一斉に咲き出すのでとてもきれいです。背丈の低い草とキノコ、ブルーベリーなどイチゴ類、コケなどし



夏のツンドラの蚊(マニリで、1997年)

か生えないやせたこの土地は、農耕民の目には不毛の大地に映ります。たしかに農耕には不向きで、米などはもちろん作れません。北海道でも、道東では、米が作れず、酪農が中心であることと似ています。

火山が多いのもカムチャツカの自然の特色です。温泉もたくさんあります。すべて露天風呂で、屋内で温泉につかるという習慣はないようです。私も温泉が好きなので入りに行ったことがあります。男女混合浴で、水着を着て入る温泉です。温泉に入っていると、近くの湿地から蚊の大群が襲ってきました。蚊の方は短い夏の間血を吸って栄養を蓄え子孫を残すことに懸命なのでしょう。こちらも黙って刺されるわけにいな

いので、顔や体にお湯をバシバシヤかけたり、時には、もぐったりして防戦します。蚊を追い払うのに忙しくて、のんびりと温泉を楽しむ雰囲気ではありませんでした。ツンドラに一番適応しているのがこの蚊だといってもいいでしょう。

トナカイとの共生

蚊のほかにツンドラに適応しているのが、サンタクロースの橇をひくことで知られているあのトナカイです。サンタクロースは、北欧スカンジナビアの北方に住むトナカイ遊牧民サーミ(旧名ラップ)をモデルにしたものといわれていますが、コリヤークの人たちもトナカイ橇で人や物資を運びます。

トナカイは雪や寒さに強いばかりではなく、好物の食べ物がこのツンドラに生えるキノコとコケなのです。夏にはキノコを食べ、冬には雪の下にトナカイゴケをひづめて掘って食べています。

コリヤークの人々とトナカイのつながりの歴史は長く、コリヤークという名前の由来も、十七世紀に初めてカムチャツカに進出したコサック兵が何度も耳にした qorak「トナ

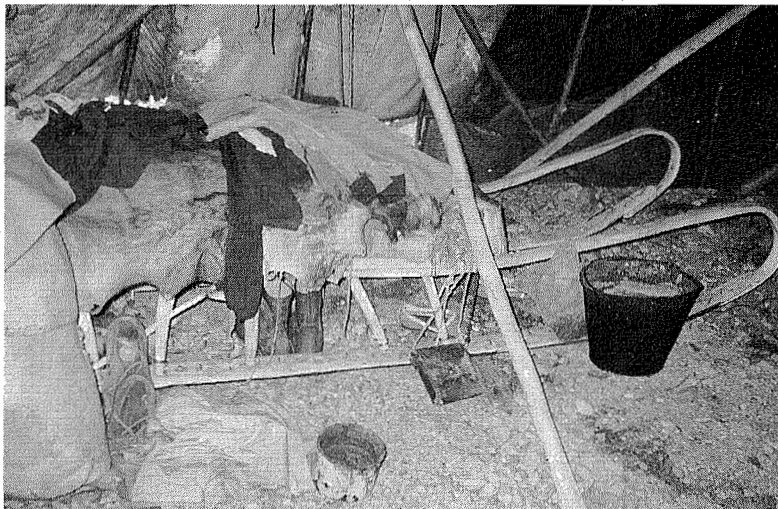
夏になると、湿地から信じられないほどのたくさん蚊が沸いてきます。しかも、おどろくのは、その大きさです。蚊なんて世界中どこでも同じ大きさかと思っていきましたが、ツンドラの蚊は北海道の蚊の二倍もあろうかと思える大きさでした。

「カイのそばで」という語が起源だといわれています。

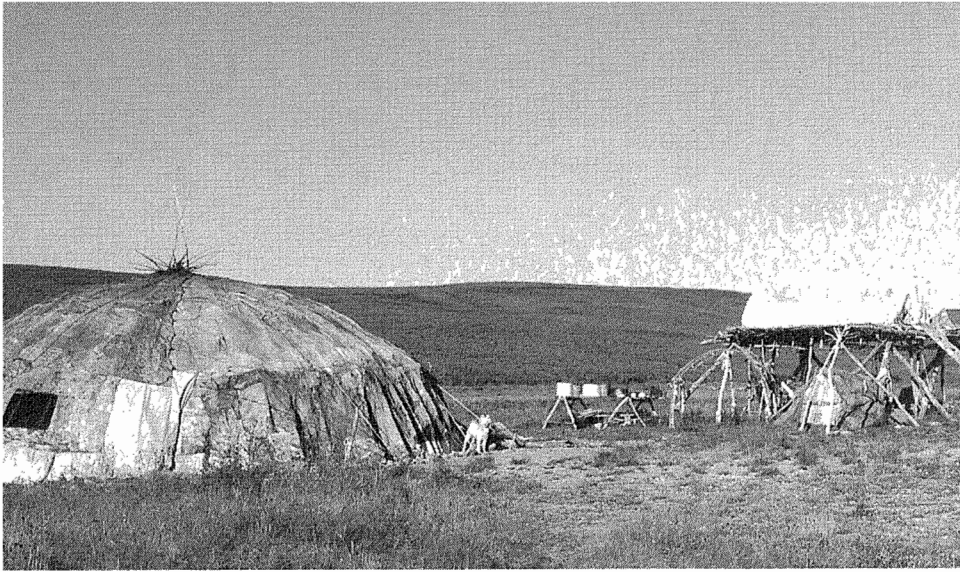
トナカイを飼うといっても、馬や牛や羊の牧畜とは違い、土地を柵で囲った牧場で飼うのではなく、トナカイの習性をうまく利用してツンドラに放牧して育てます。トナカイは単独で行動せず、必ず群を作って先頭を行くりダーに従って動きます。このトナカイの行動パターンは、人間が管理するのにとても都合がよいものです。

また、トナカイは何千頭もの群で行動するため、一カ所のキノコやコケをすぐに食べ尽くしてしまいます。すると、人間が新しい場所にトナカイを移動させます。また夏になると表面が解けて水浸しになったツンドラに大量の蚊やアブやブヨが発生します。これらの虫を避けるため

テント家屋の内部に置かれたトナカイ橇(タフロカ川で、1997年)



に、海風の吹く海岸近くや風通しの良い尾根にトナカイを移動させます。トナカイにとって人間は群のリーダーのように映るのです。蚊以外にトナカイにとって最大の敵はシベリアオオカミです。人間と犬がそばにいれば、オオカミが近寄ってこないで、トナカイは人間が守ってくれていると思っています。トナカイが増えると、トナカイを殺して、その肉を食べ、毛皮を剥いで、毛皮から靴や服、そして円柱の上に



夏のトナカイ遊牧地のテント家屋(タフロカ川で、1997年)

円錐が乗ったような独特のテントを作ります。だから、トナカイと人間は助け合って生きている、共生しているといってもよいでしょう。

コリヤークの人たちは、昔からの植物もあまり育たない酷寒のツンドラで、自分たちの食糧や衣服・住居の材料を与えてくれるトナカイと一緒に移動するという生活を何千年も続けてきました。

遊牧キャンプへ

一九三〇年代にソ連の集約定住化政策によって個人所有のトナカイが強制的に国家所有とされたために、コリヤークの人たちは、それまでの移動生活をやめ、大きな町に自分の家をもつことになりました。でも、トナカイの遊牧はやめることができません。トナカイの育て方は、昔ながらの方法を続けるのが最良なのです。困り込むことのできないトナカイ

私たちがスラウトノイエの町に居る間に、自治管区議会選挙のためにトナカイの群を連れて遊牧チームが町から二時間くらいの距離にある牧童小屋に戻って来たというニュースが入りました。私たちは、これは千載一隅のチャンスだと思い、トナカイ解体のために建てられた牧童小屋を訪れることにしました。

小屋まで行くには、キャタピラをついたヴィジイデホトという雪上車が使われます。昔は、犬橇やトナカイ橇だけでした。今は、町から町へ、あるいは町から遊牧地への長距離にはガソリンで走る雪上車やトラクター、スノーモービルが使われています。しかし、ごく最近では、ガソ

イを町で育てるわけにはいかないからです。

コリヤークの人たちは、いくつかの遊牧チームに分かれて、家屋にするトナカイ皮のテントをもって、トナカイと一緒にコケを探して、現在も広いツンドラを歩き回っています。時々、自分の町の近くにトナカイの群を連れて来て、肉や皮を収穫し、町にいる家族に運んできます。

リンの不足からトナカイ橇や犬橇が復活する兆しが見られるのだそうです。

スラウトノイエの町には六つのブリガダと呼ばれる遊牧チームがあり、今回訪れるのは、第一と第六の混成チームだという。小屋に着くと、千五百頭のトナカイがもう集まっています。目の前のトナカイの群は実に壯観です。本来は二千五百頭の群なのだそうで、町に帰る途中で千頭が群からはぐれてしまったそうです。他のトナカイ遊牧でもよく聞かれます。後で捜さなければならぬと言いますが、この広いツンドラの中で捜索はたいへんな仕事だろうと思いました。

遊牧キャンプに向かう雪上車



チュクチのトナカイ橇 (チャヌスク・ツンドラで、1991年)





中央左端のトナカイが投げ縄で捕らえられた瞬間

シベリアのトナカイは、もちろんシカの仲間です。北海道のエゾシカは、雄シカだけが角を持っていますが、シベリアのトナカイは、雌シカにも角があるのが特徴です。この角は毎年落ちては、新しく生え替わります。生え替わる度に大きくなりますので、角が大きいほど年寄りだと



トナカイと綱引き

いうことになります。

トナカイを捕まえるには西部劇のカウボーイさながらに投げ縄を投げて、角に絡ませて捕まえます。これは男たちの仕事です。三十歳も離れたところから、投げ縄でトナカイを捕まえるのですから、馬に乗って投げ縄を投げるカウボーイも顔負けの技術です。

トナカイのほとんどがソフホーズ



左端がニーナさんとその孫

(国营農場)の所有ですが、数頭から数十頭の個人所有が認められています。今回は、肉や皮を自由に処分できる個人所有トナカイを捕獲するとあって、牧童たちは殺気立っています。

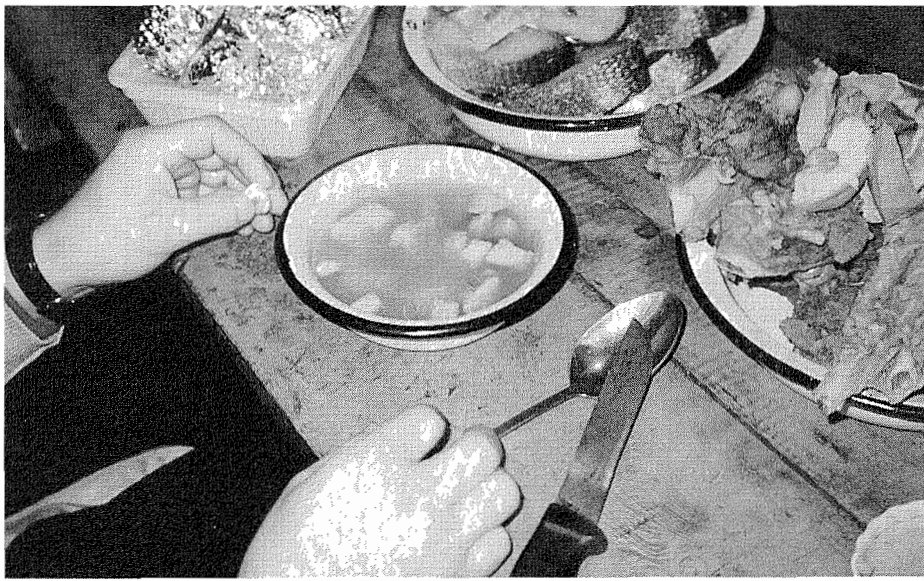
千五百頭もの群の中からどうやって自分のトナカイを見分けるのか不思議でした。伝統的な方法では、個人所有のトナカイには耳の一部を切

血を胃袋にすくっているヴィーカさん



り取って目印をつけます。両耳の切り取る数とその箇所の違いで区別するのです。しかし、数十歳も離れた遠くからではその耳の印は見えようもありません。たずねてみると、小さい頃から育てているので、トナカイの体形や模様、角の形、動作の癖などから誰のトナカイかを識別できるのだそうです。私たちが声を聞いただけで家族や友人を認めることができるのと同じだと言います。

投げ縄が枝角に絡まり、もう一本



コリヤークの食卓：左が「持参したおにぎり」、手前が「タン・シチュー」、その奥がスズキ科のオームリの塩づけ、右端が煮たトナカイの骨付き肉

の投げ縄を脚に絡めると、やがてトナカイと人との綱引きが始まります。この綱引きは人の方がいつも勝ちます。負けそうになると二、三人の加勢があるからです。力のいる仕事で、時には危険な仕事です。

トナカイを捕らえると、皮を剥いで切り分けます。男の人が毛皮に傷をつけないように慎重に皮をはぎ、女の人が内臓を取り出し、ビタミンを多く含んだ貴重な血を胃袋に詰

め、戸外に放り出して置いて凍らせます。血のソーセージのできあがりです。肉は骨付きのまま枝肉に切り分けていきます。外の気温はマイナス

トナカイ料理

マイナス三〇度の戸外で、あちこち歩き回ってビデオを回したり、カメラで写真をとっていた私も、寒くなって小屋に入りました。小屋の中

の入り口の近くには大きな薪ストーブが置いてあります。ストーブで体を温めていると、さつきまで外でトナカイを切り分けていた娘さんが戻ってきて、食事の用意を始めました。この遊牧チームには女性が二人しかいません。結婚したばかりの娘のヴィーカさんとその祖母です。お腹もすいてきたので、どんな料理を作るのか楽しみでヴィーカさんの腕前をじっと見つめていました。

ヴィーカさんがまず作り出したのが、揚げパンです。ロシア風の揚げパンは、具が入っていないピロシキを思い浮かべるとよいでしょう。揚げパンの隣の鍋で骨付き肉を煮始めました。その煮汁をすくって別の鍋に入れます。そこにトナカイの舌を切って入れ、塩とハーブで味をつけ

ス三〇度くらいですが、トナカイの肉からは湯気が立ちのぼり、作業をする人の顔からは汗が吹き出ています。

るとスープができていきます。これらの料理をヴィーカさんは手早く作った一人で作っています。

「まず、お客さんにどうぞ」と、我々日本人に揚げパンと煮たトナカイ肉とタン・シチューの三つの皿を勧めてくれました。テーブルの上には、オームリというスズキ科の淡水魚の塩漬も並んでいます。町では食べられない豪華な食事です。特にトナカイの舌のスープは、コリコリとした舌触りてたいへんおいしいものでした。

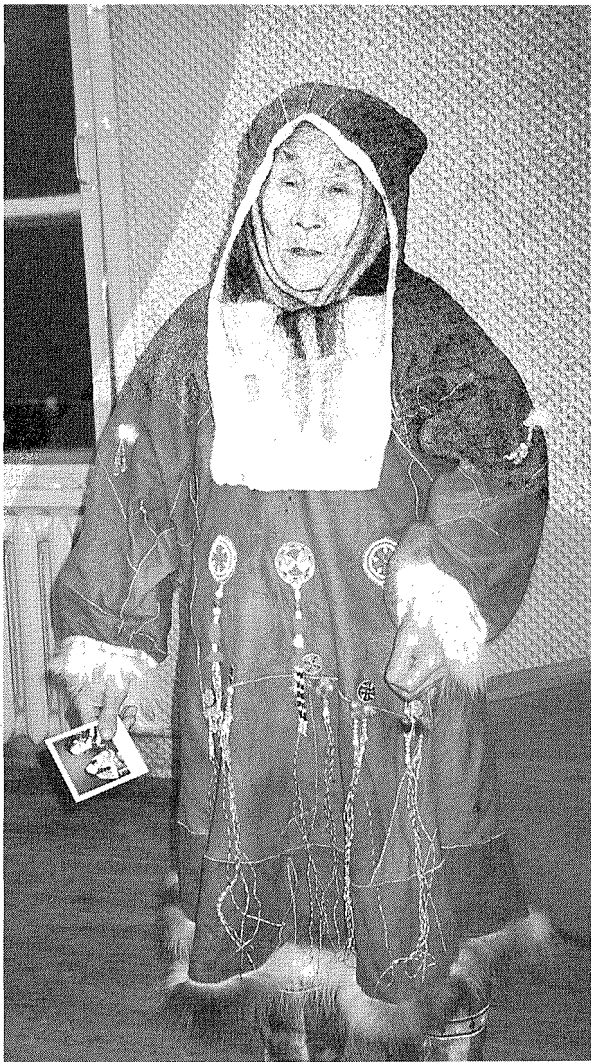
肉を食べるときのコリヤークのマナーを知っていましたので、私たちは自分用のナイフを持ってきました。コリヤークの人たちは、肉は骨付きで食べます。左手に骨を持って、食べようとする部分の肉を歯で押さえ、その部分をナイフで切り離しては食べるのです。ですからコリヤーク料理には良く切れるナイフが必要です。

防 寒 対 策

雪上車で牧童小屋まで同行してくれたのは、ソフホーズ長のウラジミール・ニコライヴィッチ・ミジーニンさんとその息子、遊牧チームの総リーダーであるアレクサンドル・テナントご夫妻とその孫息子の五人です。子どもたちは、この町の将来を担う二人といってもよいでしょう。

ロシア人のソフホーズ長はこの町の生まれで、総リーダーとは竹馬の友です。父からソフホーズ長の座を引き継いで、このソフホーズの経営に手腕を發揮しています。

他の町では、ガソリンが買えない



女性の伝統的晴れ着を着たコリヤークのおばあさん

ので発電ができず、夜中は節電のため送電を中止しているところが多いのですが、この町では二十四時間電氣が使えることから、このソフホーズ経営が非常にうまくいっていることがわかります。

その息子も将来に期待をかけられて、たびたび牧童小屋まで連れて来られるらしいのです。また、小さいよちよち歩きの子は、遊牧チームの総リーダーの孫で、見事な白いトナカイの皮で作った服を着ています。白いトナカイの皮はなかなか手に入らない皮です。そんな貴重な服を孫

にさせていることで、若いおじいちゃん牧童頭としての力量がわかります。

今回は、孫をトナカイの群に慣らすために連れてきたらしく、若いおじいちゃんとおばあちゃんは、幼い孫をどんどんトナカイの群の中へ引っばって行きます。子供は、嫌がっているのですが、しばらくの間トナカイの群の中にいました。こんな小さな頃から、トナカイに慣らしておくのです。これも立派な牧童になるための訓練なのです。

この日の気温は、マイナス二〇度。雪上車に乗って来る時も、孫を半分吹きさらしの運転席に乗せていました。後ろの幌つきの私たちの座席と比べると、とても快適とは思えません。若いおじいちゃんとおばあちゃんはどうしているかと見てみると、何と雪上車の屋根の上で寒風をまともに受けて乗っていました。

何が私たちと違うのだろうか？小さいときから、寒さに慣れていることも理由なのかもしれません。しかし、何よりも違うのは服装です。特に、靴です。牧童小屋に私たちを連れて来てくれた若いおばあちゃんのニーナ・テナントさんは、町を出るときに私たちの履いている「近代的

な靴」のことをとても心配していました。「私たちの靴を貸そうか？」と何度も言ってくれます。コリヤーク伝統の靴は、トナカイとアザラシの皮でできた二重靴で、内靴と外靴の間に枯れ草が詰めてあるので、高山に登る時の二重靴を思わせる完全な防寒靴です。

コリヤークの人は、町では毛糸やナイロンでできた現代的な服装をしています。ツンドラに出るときには民族衣装であるトナカイ皮製の服を着ます。もっと寒くなると、皮の服を二枚重ねて着ます。一枚目は毛のついた方を内側にし、二枚目は毛のついた方を外側にしています。一枚目で外からの寒い空気を遮断し、二枚目で体の温度を外に逃がさないようにし、一枚目と二枚目の間の空気が湿気を外に逃がしてくれるようになっていきます。帽子もトナカイの皮で作られ、オオカミとかクズリ獣などの毛皮で縁取りがしてある伝統的なものです。衣服や帽子などの伝統的民具とは、環境に適応した文化の結晶なのです。

もう一つの秘密は、脂肪の多い食べ物です。トナカイ肉の料理にもトナカイの獣脂を入れます。魚を食べる時にもアザラシの脂を使います。



孫を囲んで遊牧チームの総リーダーのサーシャさんとニーナさん

イチゴにもアザラシ脂を入れて練って、アイスクリームのようなものを作ります。野菜料理にもたつぷりと油で味を付けます。パンも油で揚げます。この大量の脂で太った体は、まるでもう一枚上等な服を体の内部に着ているようなものです。

ニーナ・テナントさんは、「やせた娘は、子供もたくさん産めない。

私のもとに置いていたら、一年後には私のようにこんな立派なお尻をもった女性にしてあげるよ。」と自分のお尻をポンとたたいていました。やせた人は寒そうで、寒そうな人は貧しそうで、かわいそうだ。太って子供をたくさん産める女の人が幸せなんだ、という価値観がしっかりとあるから出たことばです。

カムチャツカの厳しい自然環境の中で生活する人たちにとっては、トナカイが子を産んでどんどん数を増やしていくのと同じように、自分たちの子供がたくさん増えて、その子供が大きくなり、年寄りになった自分たちにトナカイの肉を運んできてくれるのを願っているのです。自分たちの命を続けるためには、子どもを立派に育てるのが一番大切なことだということを知っているのです。

店であるゆる種類の食糧を手軽に買える私たちよりも、自分たちの食べ物となるトナカイを追って生活するコリヤークの人たちの方が、子供を育てることがいかに大切かを知っているのだと思います。たった一日の遊牧キャンプでの生活でしたが、コリヤークの人たちの生活の一番大切な部分が少しわかったような気がしました。